

ふれあいの祭典 兵庫短歌祭

令和元年度
神戸市勤労会館大ホール



第202号

題字 出口 草 露
発行者 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦方
兵庫県歌人クラブ
会 計 〒676-0011 高砂市荒井町小松原2-12-5 石原智秋
振 替 01110-5-6903
印刷所 株式会社 甲南堂



にこやかにわかりやすく話される阿木津英氏

文部科学大臣賞
若林 久子 さん (神戸市)
ジュニア部門兵庫県知事賞
坂東 恵 さん (兵庫県立大学三年)

兵庫県歌人クラブによる恒例の「ふれあいの祭典」兵庫短歌祭が令和元年11月17日(日)午後1時から神戸市勤労会館大ホールにて開催された。参加者130名。
このふれあいの祭典は、平成元年に創設され、毎年兵庫県、開催自治体、兵庫県芸術文化協会の三者の共催で実施してきている。(なお本年は自治体の調整かなわず)。令和元年の節目の年に第31回目を開催できたことに不思議な縁を感じる。
今年の兵庫短歌祭の応募作品は、一般の部350首、ジュニアの部469首(中学校19校、高等学校9校、支援学校1校)。一般の部入賞者は文部科学大臣賞若林久子氏他11名。入選者9名、佳作12名。ジュニアの部入賞者は兵庫県知事賞坂東恵さん他11名。入選13名。佳作32名。
式典は矢野一代、山田恵子両氏の司会で始まり兵庫県芸術文化協会業務執行理事豊岡幸雄氏の挨拶。ふれあいの祭典は県民の発表の場で、県民に、研修の場をあたえてくださることに感謝。この取り組みを通して、世代や地域を越えた交流が広がり、兵庫県の文化発展につながればと願っている。より活発な活動を続



文部科学大臣賞受賞の若林久子さん

「続けて下さい」と心強い言葉をいただいた。
直彦氏が「短歌は老若男女を問わず心情を表現する叙情詩、千三百年余りの伝統を持ち、外国にはない日本独特の文化です。短歌という素晴らしい文化を次世代に継承してゆくの私達の務めです」と強調された。
表彰式は、受賞者の名前を順次読みあげ、演壇脇のスライドに入賞歌を映して、各人に賞状と副賞を授与。講評はジュニアの部を岩尾淳子氏。入賞した生徒ひとりひとりに語りかけるようにわかりやすく批評。一般の部は加藤直美氏が担当。その懇切丁寧な批評は受賞者の自信と喜びを深めるものであった。



歌評を熱心にきく会場のみなさん

休憩の後、阿木津英氏の「短歌、これまでこれから」の講演。とくに折口信夫とアララギ同人達の鑑賞のズレと対立その問題点を作品の具体例を挙げて語られた。日々の勉強を元に有意義な人生につながる短歌の在り方を改めて考えさせられた。
講演の詳細は次頁より詳しく紹介しています。
歌人クラブ副代表新屋修一氏の閉会の辞により4時40分無事終了。ご協力頂いた皆様方に厚く感謝致します。
(前田昭子)



●近代以降の女歌論の経緯
 短歌を詠まれている皆さんの関心は、「現代にあつてどんな歌を詠んでいけばいいのか」、また「どんな歌をお手本として読めばいいのか」にあると思います。このことを充分に承知の上で、「短歌、これまでこれから」折口信夫の女歌論「再考」というテーマを掲げましたのは、折口信夫の女歌論が『女

講演 「短歌、これまでこれから」 『折口信夫の女歌論』再考

（歌人）阿木津英

阿木津英氏のプロフィール
 歌人。昭和二十五年生まれ。短歌結社「八雁」主宰。現代短歌にフェミニズム思想を導入し、女歌運動を牽引する。歌集「天の鴉片」、歌論書「折口信夫の女歌論」「二十世紀短歌と女の歌」など著書多数。

歌」に限らず、短歌の在り方を指し示すものであり、現代にも本質的な問いを投げかけるものだからです。

まず、私にとつての「女歌」という用語にこめた意味を申しあげます。実は平安時代末期に「女歌」あるいは「女房歌」と言った言葉が使われていますが、これはさておき、折口信夫が短歌の閉塞の状況を語る中で使った『女歌』（女流などとも言っていますが）に関して以下の解釈があります。一つは島津忠夫氏。現実の女流の歌を問題とはしていない。アララギリズムに対する短歌の革新を『女歌』に期待したものである」と言う捉え方です。次に馬場あき子氏の解釈は「『ますらをぶり』と『たわやめぶり』の伝統の一方の衰弱を嘆き、王朝風な《艶》文体を『女歌』と称した」とされています。これ

らに對し、私の『女歌』は「男女對等觀のもとでの女がつくる歌」です。女は社会構造に織り込まれた弱者であり、相手（男社会）の期待する声しか発せられず、内心の声を言葉にすることができない。育児や家事の労苦を訴えられず、職業をもつには様々な犠牲を覚悟しなければならぬ。こうした差別を排除すべく詠われる歌を『女歌』と規定したわけです。フェミニズムに基づく短歌の在り方とも言ひ換えられます。ちなみに、この氣運の盛上がり先の駆けが中条ふみ子の登場でした。しかし、彼女の歌に對して「生理的、毒々しい、女くさい」といった非難の声があがったのは周知のことです。

●折口信夫（釈道空）の短歌滅亡論

前述したとおり、島津忠夫氏は「折口信夫は」アララギリズムに對する短歌の革新を『女歌』に期待した」と語っていますが、その折口信夫の問題意識はどのようなものだったのか。昭和22年、ある大学の講演「素人のない文学」の中で、彼は「文学としての価値の失はれた歌が非常に殖えて来てゐる」「今の歌は何もかも無差別に歌にしすぎている」と断言し、「歌なんかやめなさい。他に若い君たちに楽しくふさわしい形式がある」とまで言い放っています。アララギの写生論のいいところは、対象と格闘し、対象を言葉の世界へ移行・表現することにあります。一方では、亡霊というか弊害というか、歌にならないものまでなん

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
ポトナム短歌会(須磨歌会)	兵庫勤労市民センター(兵庫駅前)	第4日曜、午後1時半	079(557)0679 中西 健治
檀の会	神戸市勤労会館	2月、10月、第2土曜、午後1時	078(991)3073 尾崎まゆみ
万華鏡	神戸市勤労会館	第4月曜、午後1時半	078(242)1493 黒崎由起子
潮音神戸歌会	神戸市勤労会館	第1土曜、午後1時	078(431)8665 三津野幸代
海市短歌会	神戸市婦人会館(中央区)	第4日曜、午後1時	078(371)0239 中川 昭
神戸白珠の会	六甲道勤労市民センター	第2水曜、午後1時	078(881)1578 小谷 博泰
波濤神戸	保田ひで宅(長田区)	毎月中旬	078(612)9294 保田 ひで

でもかでも定型に納めたら歌になるという安直な風潮を生んでいます。いまひとつ、「連作」もそうですが、これは後で説明します。

また、大正8年の「アララギ」3月号に「短歌と文壇」という特集が組まれ、島木赤彦や斎藤茂吉達とともに寄稿。そこで、民衆化した新派歌人の不足な点」を挙げています。なお、「民衆化した新派歌人」と言うのは、宮内省派の旧派和歌に対する新派和歌、その新派和歌第二世代につづく新派和歌第三世代を指します。この新派和歌第三世代は学校にも行けず貧しい若者が多く参集しており、庶民の新しい自己表現の場として盛上がり緊張をもたらしましたが、平俗化の側面も否めませんでした。折口信夫はこれを「三十一音の言語遊戯、臭い雰囲気」と評し、次の四つの「不足な点」を明快に述べたのでした。

〔労作時間〕「小説・戯曲は創作に没頭してゐる時間だけでも長いが、短歌は口拍子でできる」「陣痛の悩みにも譬える表現の苦しみが、創作物ばかりでなく、内界を改造するのである」「熱意の時間が短いと言ふことは、歌人をば、文学者として完全な者たらしめない大きな理由である」

〔智識〕「古今も新古今も知らずして自分の作物の価値を何と比較するのか」「歌の内容が、歴史的に何処迄開発せられてゐるのかを知つてこそ、初めてほんとに自身の表現の苦悩を自覚した人」と言はれるのである」

〔経験〕「今の歌人たちは、表現の原動力が、経験と人格にあることを考へて居ない。人間味に乏しい歌人たち」

〔態度〕「鳥合の朋党・阿諛の饗宴、其を以て年中行事として、どうして文壇的な地歩が占められよう」「文壇的な作物とは、時勢に迎合し、俗衆の喝采を博する種類を斥すのではない。不易流行に相叶うて、真に常若な命を湛へた物を言ふのである」

いかがですか。大正8年のこの発言は、現代の私たちにもあてはまりそうで、忸怩たる思いにかられます。若干補足すれば、島木赤彦は「文壇で取り上げられなくてもいいじゃないか」と言った姿勢でしたが、折口信夫にとつて「文壇」と言うのは、言語芸術としての自覚とその真摯な作歌態度のことを意味していると思います。折口信夫はあくまでも文学としての価値を追求しようとしたのです。また、三十歳そこそこでした。折口信夫は、学問に裏付けられた歌論家で、あと挙げるのであれば玉城徹だけです。なお、「労作時間」のところで「内界を改造する」とありますが、「内界」とは「心のうち」「精神世界」のことです。

●連作の鑑賞に大きなズレと対立が起きるとき

短歌における「連作」というのは、一人の作者が特定の題材に基づいて複数の作品を作り、全体としてある程度まとまった一連の作品とすることで、これは伊藤左千夫の連作論に端を発したもので、アララギの伝統と言うべき

歌づくりの一つです。この連作の鑑賞、評価において大きなズレと対立が起きるときがあります。大正7年の島木赤彦の連作「善光寺」について、同人達の評価を詳しくご紹介します。

その前に当時のアララギの状況を認しておきます。赤彦と逍空が出会ったのは大正4年、翌々年の6年にはアララギの同人に大抜擢されます。伊藤左千夫亡き後、アララギの同人達が自分なりの歌を見つげるために切磋琢磨していた時期で、厳しく、しかも自由な議論が飛び交う同人誌のような様相を呈していました。若き逍空にとつても意気盛んな期間でしたが、後述のごとく、長くは続きませんでした。

- さて、赤彦の連作「善光寺」は、亡くした息子の位牌を持って善光寺に参ったことを題材としたもので、以下のような一連です。(抜粋)
①雪はれし夜の町の上を流るるは山よりくだる霧にあるらし
②雪の上を流るる霧や低くからし天には満ちて光る星見ゆ
③おのが子の戒名もちて雪ふかき信濃の山の寺に來にけり
④雪あれの風にかぢけたる手を入るる懐のなかに木の位牌あり
⑤言にいでて言ふはたやすし直照りに照る雪の上に我ひとりなり

まず、④の作品についての言評は、以下のとおりでした。
岡麓「この歌、際立つて頭に響いた」
石原純「率直な云ひ方の中に真情のこもつた様が見える」「只私の特に茲で云ひたい事は此の歌が連作中の一首とし

結社(グループ)	会場	内容	問い合わせ先
明石大門歌会	明石市立勤労福祉会館	第1土曜、午後1時	078(927)4439 伊藤 敦子
明石短歌会	明石公園会議室	第1金曜、第3火曜	078(912)2673 田岡 弘子
水襲明石支社	コープ朝霧店会議室	第1土曜、午後2時	078(914)0787 大迫 孝子
千鳥短歌会	松帆活性化センター(南あわじ市)	第1土曜、午後1時半	0799(42)2062 山田 恵子
東浦短歌会	東浦老人福祉センター(淡路市)	第2木曜、午後1時半	0799(74)2141 片山 田佳子
青山短歌グループ	立花公民館(尼崎市)	第2木曜、午後1時	06(6429)5158 たなかみち
林間短歌会	中央北生涯学習プラザ(尼崎市)	第2金曜、午後1時	06(6482)2065 登島 政利

て其光輝ある価値をあらはにしてある点である。前後の歌を全く取除いてしまへば此の歌は寧ろ散文的な要素をおほくもつたほど、冷静な云ひ方にうたはれてゐる。併し吾々は『天には満ちて光る星見ゆ』『おのが子の戒名もちて』以下の数首に充ちてゐる作者の情感をたどりながら此の歌に読み到るとき、単なる『木の位牌あり』といふ冷か言葉が、ふしぎなきらめきをもつて吾々の心に迫ってくるのを覚える」

古泉千樫「少し無理な緊張を感じるやうな處がありはせぬか。今少し考へてみたい。一二句がよくなひと思ふ」

釈道空「境涯を描きすぎた難がある。無理とは思はぬ語ばかりであつて、注文の多いのを感じさせる。頭勝ちの歌である。『あり』のつづばなした言ひ方も、一應は心牽かれるが、細かく働かぬ」

平福百穂「かちけた手を懐の中へ入れて木の位牌にコツリと触つた感じが第五句の言ひ放した現し方と共に私の心を打つた」

斎藤茂吉「鑑賞に際して事情に溺れる事なしに、静かに味わつても、いい歌であつて、結句の『木の位牌あり』と云ひ棄てたところに、獨語的の堅い強い響が籠つてゐる。あふれる涙をこらへて、流轉相を諦視するところに、近代文藝の、さうして吾等の『寫生』の光がある」

岡麓・石原純・平福百穂・齋藤茂吉は○、**小泉千樫**は△、そして**道空一人**が×という評価です。ただし、石原純は「連作中の一首という前提において、作品の価値、輝きが生まれている」こと

を指摘しています。一方、道空は「境涯を描きすぎ」「注文が多い」「頭勝ちの歌である」と批判します。アララギの人たちにとつて連作は自分たちが作ったものであり、連作の読み方に馴れていました。そこに疑問を持つことはなかつたと言えます。ただ道空一人が異を唱えたわけでは、道空はその真意を次のように敷衍しています。「純抒情の歌を『何處までも客観を盛り上げて行つて、主観に變轉しようとしている』のはよくない」。

皆さんはどう思われますか。ここで赤彦の有名な叙景歌と比較してみます。昼ふくる土用の湖の光り波ひかり揺りつつ嵐はつものる

嵐のなか起きかへらむとする枝の重くぞ動く青毬の群れ

全然違います。言葉が立ち昇っています。言葉が発動しているとも言えられます。これに対して連作「善光寺」の作品は、描写はしていても言葉が立ち昇つてこないですね。

私は道空の見方を支持しますが、ともあれ当時は道空の異論のように、親密で自由な議論がなされていきました。同じく赤彦の連作「逝く子」についても、「結局小説の内容の程度以上に、撃つ所がない」「小説風な描写となつてゐる、その態度が誤つてゐる」と、道空の見方は変わりません。次のような作品でした。

ひたすらに面をまもれり悲しみの心しばらく我におこらず
むらぎもの心しづまりて聞くものかわれの子どもの息終るおとを

●聞き合い、考え合うことから「時代を創つていく」

しかし、アララギ内部では次第に表だつた批判は道空を除いて見られなくなり、つまり、このような鑑賞の大きなズレと対立が起きたとき、赤彦とその弟子たちはアララギとしての姿勢、組織を守るために「赤彦の色調、写生道」を押し出して防衛を図ろうとした。そうしますと、道空の存在は不協和音をかもす「邪魔者」であり、結果、道空はアララギからじわじわと押し出されることになつたわけです。

私は、この時、道空が言おうとしていたことに赤彦や茂吉なりが度量を広くして耳を傾けていたら、そのあとのアララギがどんなに違つていただろうかと思ひます。いわば「力と多数決」によつて鑑賞の異論を排除していったことのマイナスはすごく大きかつたと考えます。

こうした問題は現代も同じようなことが言えます。例えば、一九九〇年代に若者たちの口語短歌が出てきた時、石田比呂志と穂村弘の間で「鑑賞のズレと対立」が起きました。私の女歌論に関する馬場あき子氏との議論もうやむやになつていますが、あの時、なぜ充的な論議の場を歌壇、雑誌が提供しなかつたのかと残念に思つてゐます。何が違つていて何が共通しているのか、お互いに冷静に議論していたら、今のよいうな時代を迎えていたであろうかと思ひます。時流に乗つてゐる者、権力を持つてゐる者が勝つというようなことで

は何も生まれません。どんな歌を求められているのかについて、お互いに聞き合い、考え合う必要があります。それがお互いの未来のためになります。それが時代に流されたり、後追いをするのはなく、「時代を創つていく」ことにつながるはずで、危機はまたチャンスです。

【質疑応答から】

※中川昭氏・安藤直彦氏との質疑応答の一部を紹介。

○茂吉が道空の歌を批判することはなかつた。道空も茂吉の「赤光」や「あらたま」について、晩年になつて評価しています。

○道空は「女流短歌史」を書いたくらいですから、女性、女歌に対する関心・期待が高かつた。そもそも彼の民俗学には女性をテーマにしたものが多くあります。

(記録・藤本朋世)

「受賞しました」

- ☆半どんの会文化賞 令和元年7月21日 茅花短歌会
- ☆日本歌人クラブ近畿ブロック優良歌集賞受賞 令和元年9月14日
- ☆岡生夫『草食獣 第八篇』 令和元年12月11日
- ☆兵庫県ともしびの賞 前田昭子

結社(グループ)	会 場	内 容	問い合わせ先
ひだまり歌会	大阪市立総合学習センター	第2火曜、午後1時	0797(84)8881 桂 保子
短歌を楽しむ	コープカルチャー西神南	第1土曜、午後1時	
芦屋水甕短歌会	芦屋市民会館	第2土曜、第4金曜、午後1時半	0798(43)6820 加藤 直美
心の花兵庫歌会	アステ川西6Fルーム1(川西市)	奇数月第1土曜、午後2時	072(794)3083 足立 晶子
宝塚白珠の会	宝塚東公民館(宝塚市)	第3火曜、午後1時	072(794)0614 星野 敏江
玲瓏関西歌会	プレラにしのみや(西宮市)	2/8、6/13、10/3、午後1時	0798(52)7448 小林 幹也
コスモス葛の花	八千代プラザ(多可町八千代区)	第2水曜、午後1時	0795(37)0680 岸本しげ子
白珠加東支社	滝野公民館(加東市)	第2水曜、午前	0795(48)3679 片山 洋子
茅花短歌会	ふれあい交流館(稲美町)	第2水曜、午前9時半	079(492)1766 前田 昭子
てのひら	NPO法人てのひら(高砂市)	第1土曜、午後	079(442)2476 石原 智秋
東加古川短歌会	加古川総合文化センター(加古川市)	第2金曜、午後1時	079(423)5168 新屋 修一
コスモス加西	中央公民館(加西市)	第2木曜、午後1時	0790(42)0415 藤岡 成子
	アステシア(加西市)	第2金曜、午後1時	
小野短歌会	コミュニティセンターおの(小野市)	第1日曜、午後	090(3895)5022 芝本 政宣
下東条短歌教室	コミュニティセンター下東条(小野市)	第4日曜、午後	0794(67)0824 山本 満代
東条短歌会	東条公民館(加東市)	第2日曜、午後	0794(62)2846 松尾 鹿次
美加志保巨勢教室	巨勢教室(加東市東古瀬)	第3日曜、午後	
銀の道短歌会	生野メインホール(朝来市)	第4金曜、午後1時半	079(672)2334 中島眞喜子
さくら木短歌会	枚田岡会館(朝来市)	第3日曜、午後1時半	
姫路水甕歌会	姫路市民会館 指導 小畑 庸子	第3土曜、午後1時	079(232)4003 生田よしえ
香寺短歌会	姫路市香寺公民館	第2水曜、午後1時	
コスモス藍の会	姫路市民会館	第2土曜、午後1時	079(448)0895 久米川孝子
コスモス姫路	姫路市民会館	第3日曜、午後1時	079(269)0513 飯田 進
塔姫路歌会	城南公民館(姫路市)	第2日曜、午後1時	079(322)1878 斉藤 わこ
文学圏社	姫路花の北市民広場(姫路市)	月初めの午後	078(961)5676 浮田 伸子
ポトナム姫路	姫路市民会館	第3月曜	079(266)3603 糺川 範子
赤穂短歌の会	赤穂市民会館	第4土曜、午後1時半	0791(48)0137 尼子 勝義
佐用姫短歌会	西山会館(佐用町)	第2火曜、午後1時半	0790(82)3019 衣笠 邦恵
「白圭」龍野歌会	たつの市生きがいセンター	第4月曜、午前10時	0791(63)4734 内海 永子
揖西短歌会	揖西公民館(たつの市)	第4日曜、午前10時	0791(66)2186 菅野 仁孜

ふれあいの祭典 兵庫短歌祭 入賞作品評

文部科学大臣賞

若林 久子(神戸市)

・平和・平等こんなによさしい手話の文字両手一ぱい左右へひらく

政見放送などでその横に手話が付いている場をよくみかける。かなり細部に渡った内容であってもそれぞれの事柄に一つ一つの手話の動作がある。手話をする方もだが、読み取っている方においても、その技術の習得にはいつも感心させられる。私は手話の動作については、何も知らないが「平和・平等」は両手をいつぱいになったらに広げる、という作法でするらしいことが良く伝わってくる。この歌の味わいは「平和・平等」の手話の作法はこんなに平易なのに、「平和・平等」の実現はなぜそう簡単ではないのか、といった背景が暗示されていることであろう。イデオロギーを打ち出すのではなく、純な思いが具体を通して自然体で詠われている好感度が高い。それぞれの名詞がぎくしゃくせずその心とよく調和し統御されている。(安藤直彦)

兵庫県知事賞

谷 綾子(朝来市)

・みどりごの眠りのリズムととのえは音をたてずに食器を洗う

何という慈愛にみちた眼差しでしょうか。読み手の私まで優しく豊かな心に満たされます。へ眠りのリズムととのえばへ音をたてずにに作者の心の有り様と力量を感じます。作今の数々のおぞましい事件を思う時、このような母と子が少しでも多くと祈らずにはいられません。そして又、万葉集編纂より千三百年受け継がれてきた歌の本質が現代短歌のこの歌に見事に継承されていると、何かとても嬉しく思われるのです。(船橋貞子)



谷綾子さんと御主人

兵庫県議会議長賞

鈴木 裕子(高砂市)

・「まあいつか」曖昧模糊をかき混ぜてカプチーノの泡ごくと飲み干す

「まあいつか」の初句が読み手を引き付ける。曖昧模糊を抱えることは誰にでもある。もやもやした気分が陥る。

どう乗り切るか。カプチーノをかき混ぜ泡をぐくと飲み干す。この具体が心の思い切りを上手く表現している。ミルクの泡の甘さとエスプレッソ珈琲の苦さが全身をリフレッシュしてくれ、曖昧模糊はふっ切れるだろう。カプチーノという今風の素材を歌にして、共感と呼ぶ秀作である。「ごくん」という表現も生きている。(芝本政宣)

兵庫県教育委員会賞

吉田千代美(高砂市)

・野良着しか浮かばぬ伯母の形見分け大島紬に仕付けのかかる

伯母は野良着しか浮かんでこない。その伯母が亡くなり、大事に仕舞っておかれた伯母の持ち物を形見分けすることになった。その中に、大島紬の着物があった。大島紬は高級品で伯母はいつの日か大事な日に身に着けようと思っていたに違いない。だがその機会のないまま世を去った。仕付けのかかったままである大島紬を目にしたとき、野良着姿で一生懸命畑仕事をし、一度も袖を通すことなかった伯母の一生を思い浮かべ感無量だったであろう。(清水昭男)

(公財) 兵庫県芸術文化協会賞

山本 道子(神崎郡)

・かがまりて豆撰るふたつの影法師昼の障子の温もりに揺る

初冬の日溜りで豆選りをしているお年寄り：私には胸が締め付けられるほどに懐かしい子どもの頃の原風景である。大豆でも小豆でも収穫の最後の作

業として虫食いや割れた豆を撥ね、更に色艶や形状まで目で確かめて選別する。機械には任せられないずいぶん根気のいる仕事だが、傍目にはゆつたりした時間が流れているように見える。障子に映る二人の影、昼下りの静謐な時間までをも想像させて過不足のない詠みぶりである。(中島眞喜子)

神戸新聞社賞

西橋 美保(芦屋市)

・とげとげな自分を連れて海へゆく

短歌は上から下へ読む。その時間の流れの中で読者の期待をどのように「裏切る」かが作歌の重要なポイントだと思う。予想通りだと面白くない。飛躍が過ぎると理解して貰えない。裏切りかたの案配に作者は苦心する。小説や映画なども同じで内容よりそこらへんの組立てに作者の個性や才能が出ると思う。どんな三角形でも内角の和は180度で直線の角度でもある。だれも文句が言えない。この歌は情と理の融合を試みて、飛躍した後の着地はほぼ完璧に近い。(飯田 進)

兵庫短歌祭実行委員会賞

山村 幸子(たつの市)

・山間の墓域せばめて太陽光パネル連なる基地めく故郷

山の中の墓地という時代を超えた場を舞台に、太陽光パネルと基地、言いかえればエネルギー問題と沖繩を核とする防衛問題、今の日本における最も重要な事案の二つを浮きあがらせた。

現実に見るのは先祖代々の墓所の領域を侵して設けられた太陽光パネルだがその景に基地をイメージする作者の心情には、この国の現代を生きる者の鋭敏な感性と深い思考が籠っているようだ。そこが故郷であることに、一層の切実さを感じる。

(藤井幸子)

兵庫県歌人クラブ賞

青田 綾子 (神崎郡)

・ベビーカーに熟寝せる子がときに笑む無花果の実のふとる葉かげに

あふれ出る母の愛がこの歌のすみずみまで匂います。まるまる太った幼子がベビーカーの中で夢見ごちで微笑みながら熟睡している。ふくよかにふくらんでいる実の多くついている無花果の葉の陰で、まどろんでいる幼を温かく見守っているまなざしが感じられます。一幅の絵に出会った様な豊かな気持ちになりました。(片山田佳子)

兵庫県歌人クラブ賞

生田よしえ (姫路市)

・息つめてみつむる幼の影のなか蟬は やうやく脱皮終へたり

七年間を土中に過ごした蟬が飛びたつまでには脱皮という大仕事が続いている。私も一度その現場に遭遇したが小さな生き物にとって正に命を賭けた大事であると思った。殻の割れ目から身を反らせ時をかけて出てくる様は、異様であり苦しげであった。脱皮の途中で猫にでも見つかれば一たまりもない。その様子を幼が息をつめて見つめている。幼の目は作者の目でもあろう。

幼と作者が向き合っているのは、命そのものなのだ。(内海永子)

兵庫県歌人クラブ賞

豊福 敦子 (大阪府)

・子ら送り鍵を鎖すときまたひとつ逝く夏がありひとりに戻る

孟蘭盆に子供たちが帰省したのである。数日間、家が賑やかになる。作者はご馳走を作り、歓待する。楽しい日はすぐ過ぎる。子供たちが立ち去ると元の寂しい生活となる。「鍵を鎖すとき」から玄関の様子、作者の寂しい気持ちが伝わってくる。「またひとつ」「ひとりに戻る」が効いている。作者の孤独を強く感じる。作者にとって夏は大切な人生のひとつこまであった。独居者の多い今日の状況を示す歌にもなっている。(足立勝蔵)

兵庫県歌人クラブ賞

藤岡 和沙 (加西市)

・桜湯の中ではんなり開く花、かういふ生の閉ぢ方もある

「はんなり」とは、上品で華やかなさま。ぱつと明るいさま。桜湯を飲んだ誰もが茶碗の中のこの景色をリアルに自分のものとすることができにちがない。その美しさと香りを愛でながら、人の死の有りようへと転回する結句が意外性を持って飛び込んでくる。「開く」「閉ぢる」の収まり方も良い。死の怖れや無常さを熱湯に花開く桜のように受け入れられたら、人は死を幸いと呼ぶかもしれない。(山田恵子)



安藤代表より表彰される左から豊福、藤岡、前田さん

兵庫県歌人クラブ賞

前田 陽子 (洲本市)

・枇杷色の大きな稲穂なみ打てば来年 減反の決意のゆらぐ

実りの秋、丹精して育てた稲の豊作は農家にとって何よりの喜びの筈である。だが来年からは減反しなければならぬという苦しい現実、心は重く複雑な気持ちになる。陽に輝く穂波を見れば、減反の決意が揺らいでしまうのだ。米作に勤しむ人の真情が率直に読まれていて心に響く作品であるとともに、国の減反政策をも考えさせられてしまう。「枇杷色」が稲穂に注ぐ作者の眼差しを思わせて温かい。(牧野秀子)

入選 (9人)

片山田佳子 (淡路市)

・雨の日は家電の声に「ハイハイ」と返事している独りの暮し

西川 明美 (養父市)

・小康に吾の名の由来を語り出すつね 寡黙なる父の饒舌

矢内 温代 (神戸市)

・自転車で坂下り来る少年が一期一会の青き風生む

中村かずえ (伊丹市)

・バックして当てたる小さき傷にさえ 点る思い出 返納近し

堀井 純子 (養父市)

・風船に全部吐き出すため息が染しげに風に乗りて消えゆく

真住 純子 (赤穂郡)

・残照は閉鎖に寂れし工場の連なる窓にしばし輝く

安保 頼子 (朝来市)

・足萎えて走れぬ二人を待ちくたえて車掌は発車の合図遅らす

西村 久代 (姫路市)

・二束の菊を包める新聞のトランプ大 統領半ば濡れたり

小野はつね (姫路市)

・すこしづつ体と心がずれてゆくから 秋の風吹き抜けて

佳作 (12人)

杉岡静依 (西脇市)、濱 守 (朝来市)、大垣一美 (朝来市)、桐山徹郎 (朝来市)、長井淑子 (西脇市)、梅本順子 (川西市)、渡辺啓子 (神戸市)、加藤直美 (西宮市)、内海永子 (たつの市)、下村千里 (姫路市)、真砂晃美 (大阪府)、竹川たづる (姫路市)

ジュニア部門入賞入選作品選評

岩尾 淳子

本年度のジュニア部門参加校は中学校19校、高校9校、支援学校1校。応募総数は469首。どの作品も言葉遣いが若々しい。学校生活での様々な場面や身近な自然を澄んだ感性でよく観察している。また、身近な動物や家族への心情をこまやかな表現で伝える。自分の言葉で今を生きる思いをまっすぐに伝える歌、新鮮な感覚で目に留まった風景を切り取る歌。どの作品も作者の個性が光っており、歌にみずみずしい感情が溢れている。印象的だったのは思春期の心の揺らぎを静かに見つめる歌に出会えたこと。言葉で表現することは自身の心と向き合うことだと改めて教えられた。応募された方々これを契機にして短くてささやかな詩である短歌の世界に入ってきてください。そしてさらに新しい自分やたくさんの歌と出会ってください。このたびの応募にさいしてご指導いただいた先生方に感謝申し上げます。

兵庫県知事賞

兵庫県立大学附属中学校

三年 坂東 恵

・その距離が心の距離であってほしいとなりに並ぶ線香花火

夏の夜だるうか。寄り添いながら線香花火をする人がいる。その人への秘めたときめく恋心がせつない。身じろぎすると触れそうになる体の近さと同



知事賞受賞の坂東恵さん

じように、その人の心も自分に寄り添ってほしい。距離という硬い言葉をつかうことで清潔で美しい祈りのような表現が生まれた。線香花火の輝きが真情を鮮やかに暗示して精彩を放つ秀歌

兵庫県議会議長賞

丹波篠山市立篠山中学校

二年 能勢 大志

・本当に合っているのか解答欄記号問題アが五連続

試験の解答をしているさなか、記号の答えがアばかり五つ並んだ。そんなはずはないと不安にかられる。一瞬の心理を素早いタッチで切り取り、無駄のないスピード感あふれる表現で活写

している。動揺する自身の内面を正確に把握する。一歩ひくことで漂うユーモアのセンスが冴えている。

兵庫県教育委員会賞

丹波篠山市立篠山中学校

二年 亀山 珠希

・ホースから出た水しぶき銀色にトマトを包む宝石のごと

真夏の畑だるうか。赤く実ったトマトに散水する瞬間を絵のように描写している。水しぶきがかかったトマトは銀色に輝く。そのひかりの粒をみずみずしい感覚で捉えている。暑さにむせる土の匂いや、草いきれ、太陽の輝きまで立ち上がってくる。生命感にあふれた色彩表現や比喩のしかたに自然に触れる素直なよこびがある。

(公財) 兵庫県芸術文化協会賞

灘高等学校

二年 杉浦 蒼大

・雨が降り川は流れてまた雲にそんな世界にぼくらは生きる

雨川、雲と水の循環に託して自然とそこに流れる時間を大きくとらえ、スケールのひろい世界観に健康な力がみなぎっている。窮屈な自分の世界に閉じこもらずに、広い外界に向かって心を解き放つ。たからかに僕らは生きると言いつつ、確かに踏み出してゆく未来が立ち上がってくる。

神戸新聞社賞

姫路市立豊富中学校

二年 秋田 樹里

・病犬の歩く足音トコトコが聞こえるだけで涙が出そう

自宅で飼っている犬が病んでいるのだらうか。その苦しみを自身の痛みとして感じ、懸命に歩く犬の足音にも心が震えている。命のかけがえのなさを深く見つめる時間が切実。足音を聞く感覚を生かした表現が印象的。

兵庫短歌祭実行委員会賞

丹波篠山市立篠山中学校

二年 橋本 佳歩

・通学路ふとした時に聞こえる木の話し声虫の歌声
毎日の通学路にひろがる身近な自然に目をやり、四季の変化を楽しむように心が反応している。木立の騒めき、虫の声、それを見逃さない繊細な観察力が生きている。言葉の繋げ方が巧みであり、無理がない。下の句のリフレインに弾むような心情が託されて歌の内容とよく合っている。

兵庫県歌人クラブ賞

兵庫県立大学附属中学校

二年 中村 有希

・ふと見ると「あつたか〜い」が「冷た〜い」に変わったと気づく駅の自販機

春から初夏へかけての風景だらうか。自販機の表示がいつのまにか変わっている。季節の移ろいを人工的な設置物によって気づかされるという新鮮な発見が楽しい。何気ない風景にもこまやかに心が動いている。

兵庫県立山崎高等学校

二年 藤本 温子

・物忘れ不安もあるねおぼあちゃん安心してよそばにいるから
・祖母を思いやる優しさがそのまま語り掛けるようなやわらかな言葉遣いになった。物忘れすることは不安であらうと相手の気持ちに寄り添い、深く想像する力が柔らかな言葉遣いの背景にある。人間味あふれる心情が歌のすみずみにゆきとどいている。

兵庫県立多可高等学校

二年 西村 拓也

・教室を騒がせたのはギンヤンマすばやく網持つ虫好き先生
・夏の教室にギンヤンマが訪れた。空気がほどけ歓声があがる。そのときの雰囲気を生き生きと描いている。虫の好きな先生の行動に親しみをもち、学校生活を級友たちと楽しむ心がある。

神戸第一高等学校

一年 藤原 菜乃

・君を待つ集合場所の噴水がいつもよりもキラキラ見えた
・みずみずしい恋心を噴水のひかりに託してシンプルに詠んでいる。集合場所の噴水としたことで場面が具体的にくつきりと見える。

神戸市立上野中学校

三年 坪田 龍樹

・空に滲む飛行機雲の曖昧に受験の夏の気持ち重なる
・飛行機雲はたちまち空に溶けてしまふ。その頼りなさを曖昧ととらえ、自

身の受験を背負いつつ沈みがちな屈託した気持ちを重ね合わせている。自分の心と向き合う真摯な歌。

神戸市立星陵台中学校

二年 向井 悠真

・太陽はもつといたいといわがままな赤のパレット
・夏至のころの長い日暮れ。なかなか沈まない太陽をユーモラスに擬人化している。赤のパレットの比喻も夕焼け空を感覚的に捉えていて巧み。

入選(13名)

姫路市立香寺中学校

永井 奏多

・弟が歌を聞くととき口ずさむめいわくだけどもだまって聞こう
・スツと立ち風に吹かれてゆれている
・仲良く並ぶ夏のひまわり

姫路市立香寺中学校

中野 圭梧

・「おはよう」のあいさつがわりブザー音 友の笑顔で始まる一日
・回れ右あっち向いてほいひまわりよ別の景色も見ようや僕と

姫路市立豊富中学校

福迫 拓真

・ソメイヨシノは全てクロン兄弟で同じ顔して咲きそろうてる
・暁に二人で駆けし河川敷今はよもぎの生い茂るのみ

兵庫県立農業高等学校

中路 万莉

・暁に二人で駆けし河川敷今はよもぎの生い茂るのみ

灘高等学校

岩本 大輝

・君がいたマンションの窓仰ぎ見て桜

灘高等学校

牛尾 誠

の花は今年も咲いた

高砂市立竜山中学校

藤本 佳奈

・さらさらと柵田で音だけ聞いている時さえ忘れ夏の夕暮れ
・民泊やよかばい体験唐津弁海も山もみんなよかばい

高砂市立竜山中学校

濱中 愛梨

・丹波篠山市立篠山中学校
・青空はいつも見ているはずなのに不思議と涙あふれ出てくる

丹波篠山市立篠山中学校

酒井 優太

・一輪の思いを込めたカーネーション時計見つめて「ただいま」を待つ
・この問題教えてくれる?と尋ねても首をかしげる窓辺の小鳥

丹波篠山市立篠山中学校

新家 礼響

・テストでのピリピリ感がたまらない静かに迫る始まる時間

丹波篠山市立篠山中学校

藤本 暖仁



左からお母さん、先生、山口隼杜君

佳作(32名)

相生市立矢野川中学校

福本 陽香

神戸第一高等学校

三谷 勇人

兵庫県立山崎高等学校

西田 悠真

三木市立三木中学校

石田仁唯奈

三木市立三木中学校

戸谷 妃花

神戸市立神港橋高等学校

家田 帆海

丹波篠山市立篠山中学校

上野 凜

兵庫県立作用高等学校

牧 僚佑

兵庫県立作用高等学校

瀧岡 佳乃

姫路市立豊富中学校

戸田凌太郎

姫路市立豊富中学校

森 慶次郎

三木市立別所中学校

中村ホタル

太田 貴士

松本 乃愛

山本 夏輝

稲継 雛菜

牛尾 心来

木下 晴香

後藤 美咲

前本 悠花

百瀬 友里

井戸口瑞希

安福 陸

中田 悠斗

山本 愛夏

糠野 湊那

五藤 歩果

栗原 ゆう

村上 陽香

丹沢咲葉子

堀田 侑那

藪内 理紗

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

柳学園蒼開中学校

平成三十年度

兵庫短歌賞応募作品評

はじめに

本年度の応募総数は三十七編、二十代から九十代半ばまで、各世代に渡って活潑な意欲的な作品のご応募をいただいた。「兵庫短歌賞」「新人賞」「奨励賞」受賞者作品については六月の「会報」に掲載済み、ここでは惜しくも賞に漏れた作品を紹介し、選考委員の各評を参考にされ、次回に期して頂きたく願う次第。よき作品は生を強むるという、お互いにそうした作品を共有し合いながらさらに存在意義大きい超結社の兵庫県歌人クラブでありたく思う。

安藤 直彦

詩を盛り込もう

三津野 幸代

「老いなりいなり」

杉村 芳美

乗車していきなりに席ゆずられる静かにすわりてスマホ触らず
二句は「いきなり席を」としたい。現代の若者は乗車するとすぐにスマホを操作。そんな風潮をやんわりと批判しているのが窺える結句である。

・今日はなに昨日はなにをしたのかと暑さの中で記憶は溶ける

老いてくると昨日のことは疎か今朝のメニューさえ思い出せない傾向がある。ましてや暑さが加わると尚更である。結句に詩があり心情を余すなく表出。

「念仏はつとつとつたつた」

空地 秀晃

・幽世ゆ母の飾らぬ播磨弁「もう、何しよん。精らいてうたい。」

作者ばかりか日々歌と共にある者には、幽世からの母上の言葉は身に沁みる。母上の声を心の裡に聞き留めた作者に脱帽。「精らいて」詠いましょう。

・われを濡らすこの朝露の一滴もやがて琵琶湖へそそがれてゆく

細やかな景より大きな景へと広がりのある一首。作者の立ち位置は何処か。連作とはいえ一首独立の形を取りたい。左右の歌に凭れすぎないこと。

「口田の物差し」

岸本万由美

・ポップコーン無造作に口に放り込む偶には投げたし いつも思いぬ
憤懣やる方ない思いを抱いた経験は誰にもある。共感を呼ぶ一首だが下句を具
体で述べると更に良い。

・燃え滾るストーブの炎の烈し一連のドラマ発生す

ストーブの炎から生まれるドラマにやはり具体が欲しい。この歌を含めてリズムの調っていない作品が二十首中十首。特に字足らずは落ち着かないので要注意

「随想」

白井てる子

・平成もおわりてものみな新しき年を迎えん老を忘れて

令和という新しい年を迎える心意気を存分に詠む。「老を忘れて」の結句に前向きに人生を送る作者が出ている。

・厨にも春の陽させばあたたかし昼餉の支度に心もはぶぶ
一連新仮名なので結句は「はずむ」としよう。春の陽の差すキッチンでいそいそと、ルンルンで昼餉の仕度をする作者。いつ迄もお元気で頑張ってください。

言葉は正確に使うこと

中川 昭

「鏡のわたし」

鈴木 裕子

・氷山の一角のように足先をちよんと出したり夜のバスタブ
何となくうきうきする日よ消しゴムの新しい角使うみたいに
ケアマネとしての日々の息づかいが淡々と歌われた一連、柔和な作者像が伝わってくる。個に執するがゆえに山場のないのが欠点だが、上げた二首の感覚は捨て難い・氷山の一角、消しゴムの新しい角、余人の目の届かぬ清々しさである。

「新しき過去」

前谷 節子

・この浜にいがり頭の群れ遊び素朴に健全過ぎ過去なり
・冷やこさが身に沁む師走や年毎に過去は積まれて越年重し
いがり頭の素朴な健全さ、それは自らの過去につながる健全さだろう。年を重ねて過去をまぶしむ心情がいい。冷やこさという言い方もいい。旧仮名遣いのようにだが誤りが多く、一語一語丁寧に歌えば、作品はもっと輝く。

「一人旅」

嶋澤 隆

・八十半ば安芸のしまなみ眺めつつ亡妻との旅が胸中過る
・虚しさに伴いさ加えた晩歳期独居の吾に気負いは非ず
亡妻の面影をしようとして一人旅を続ける残生に、沈んだ悲愴感はない。いや、それは胸に取めているのだろう。八十の半ば、人生を遠観し得る者のすがしさがあ

「被るる」

「被るる」などの語法上の問題は解決したいところだ。

自分の良さを最大限に引き出すこと

小林 幹也

「ひつて足りなく」

山本 圭子

・足先に触れくる猫はもうぬない足が恋ほしむその温もりを
・亡き猫の定位置なりし椅子がいま午後の日差しにあたためらるる
右の2首のような猫との時間を懐かしむ歌がとてもよかった。歌い慣れた感じがあり、粒もそろっていた。ただ題名も含めいまひとつインパクトに欠けた点が惜しまれる。

「木の芽おこし」

内山 嗣隆

・思い出の多くは川とともにあり終戦の日も雑魚をとりいき
・コンパインの轍に薄氷はれる朝身じろぎもせず侍てる白鷺

たんたん」と詠まれた風景でありながら、それでいて意外性があり、そこが歌を一読したのちも余韻として心に響く。こういう秀歌があるのに、それが目立たないのが惜しまれた。並べ方を再考してほしい。

「六十五の手習い」

芝本 政宣

・雨傘がゆがんで見える喫茶店きみが通りを汗ばんで来る
・じゃああなたが最後の言葉となるような気がしたあの日の海の青さよ
これら良質のノスタルジーを感じさせる歌がよかった。冒頭から題にある「六十五の手習い」として、万葉集を読み、旧仮名に触れたという歌がつづくがそれよりもよい。これらが前面にあれば、評価はもっと上がったいただろう。

「笈摺」

塩見 俊郎

・山科の大石良雄の寓居跡ちぢれしもみじ庭に埋もる
・風邪に臥す一週間に和らぎし日差しに誘われ蠟梅は咲く
歴史の重みがある場所を詠み上げた歌に風情があつた。ただ「ちぢれし」「和らぎし」の「し」の使用には疑問が残る。厳密に言えば、ここは過去ではなく、完了の助動詞にすべきであろう。

個性や独創性を刻印

藤岡 成子

「青い菊花を咲かせるやうに」

大江 美典

・死者だけがすべてを晒す不条理をデルフィニウムの花で覆つて
・同意書に母とあなたの名が並ぶ青い菊花を咲かせるやうに
「献体」という人生の終わり方がある。二首目は、その事を詠んでおり、家族の同意を得て献体を登録したのだ。一連を通じて詠ませる構成になつていて秀逸。全体的に重い内容なので、息抜きの叙景歌があつてもいいかも。

「秋の歌」

上村 武男

・終命の時は近づきつつあるをこのころひとは百歳をいふ
・柿畑の柿は夕陽を浴びてゐて畑はいちめん柿色に映ゆ
歌歴の長い、力量のある作者だと感じた。一首目、心の深い部分にじんわりと伝わり胸を打つ。二首目は、柿畑、果物の柿、そして柿色と「柿」を三回詠み、それぞれ異なるものを表し、味わい深い作品に仕上げている。

「人生百年時代」

藤原 暁美

・学校数三分の一になるといふ三十年後の我が国やいかに
・百年も生きる自信はなくても曾孫に会ひたし月にも行ききたし
・気持が前面に出ている、ポジティブな人柄が感じとれる。「三」の数詞の重ね、「たし…たし」の重ねなど工夫されているが、もう少し対象をずらし、一步退いた位置から物を詠われたら更に良くなるだろう。

「真つ直ぐに降る雨」

遠藤 和子

・紫陽花のはな咲く時に吾を産みて梅雨が好きだと空眺めおり
・綺麗好きでおしゃれが好きで母でした仕上げの紅は我が手にて引く
施設に入所されていたお母様のご逝去された様子が、細部に渡り素直に詠われていて、悲しみが諸に伝わり哀切。やや散文的な歌が見受けられるので、誰とも違ふ自分なりの見方をし、個性や独創性を刻印してほしい。

一連における統一観と二首の自立性と

安藤 直彦

「なごみ庵」

老月 良一

・なごみ庵宿毛店に入りたりうどんを注文ファミレスもどき
・生ぬるきシャワーを頭から浴びる排水口は海へと続く
日常を脱しての軽いタツチの嘯目の一連。それぞれの場の展開は面白くよく分かるが、表面的、報告的であるきらいがある。意味の重量を軽くしつつも、次に詩としていかに翔びたつかという課題が残る。二首目はかなり遂げられているとみた。

「娘の声」

高田奈加子

・我が産みし娘の骨は冷えをらむ墓の中に雪降る朝は
・青春に挟んだ桜の花びらは色褪せてをりそれでも語る
逆縁の我が娘の死を軸とした一連。物語的な展開は、惹きつけ読ませるのであるが、前掲二首目などの場合、今一つの、一首の自立性といふことの課題があるうか。一首目はかなりの自立性もあるとみた。それぞれが自立しつつ全体で統一する。

「追憶の時空」

遠藤 瑛子

・アランフェスのギターの音色に誘われてわたしをたどる追憶の時空
・夜空行く機影は見えず信号灯ピカリピカリと明滅しゆく
全体的に気迫のこもった動きのある表現に好感をもつて受け止めたが、惜しむらくは、二首目の「ピカリピカリ」のように、慣用句的な表現が入ることである。「読みし」「話はずんで」など一首の中の口語と文語の文体的な統御を。

「七年の繭」

辻本 和美

・猫の子を八十川せがせがに捨ててはかなごと満ちくる潮が押し流しゆく
・秀太屋のタミさんの孫 わたくしを育ててくれた七年の繭
紀勢方面への帰郷か旅の一連、動きがありなかなか読ませる一連。一連の冒頭歌の「太古のおう」など一部にみられる慣用的な表現が惜しまれる。二首目、「七年の繭」も暗示的ではいいのだが、一首の構成上、語の唐突感が否めない。以上、それぞれに良い処は控え、これからの資することを主に述べさせていただいた次第。

連作は題名と一首目が大切

尾崎 まゆみ

中山 敬子

「口は好口」

・晩秋の波動にのりて胸を刺す何を語るや梢の鴨は
・ぶかぶかと播磨の沖に遊びしが佃煮となり旨し飯蛸
身近な鳥や花の歌に、季節の流れを愛おしむ心が見えるのが良い。食べ物の歌のユーモラスな表現が光るのも、命を慈しむ心が支えているから。春から冬を駆け抜けたので、散漫な感じになつてしまつたのが惜しい。

「駱駝の首に」
・双葉になるへヴンリーブルーのさみどりを濡らして雨は土に吸われる
・たまきわる命の音や手のひらのスマホ画面ゆ胎児の鼓動
抒情を感じさせる双葉の歌。古典の枕詞から現代のアイテム、スマホまでを一首に収める既知。教養の深さを、命への期待で包み込む。命を繋ぐよるこびが心地よいが、才気をもう少し全面に出してほしいとも思う。

渡辺 啓子

「叫びの増嶋」

・背に腕に波うちわたるししむらの発止とくひこむ利那の土俵
・国技館出でゆく背なを濁りなき櫓太鼓の音が押し呉る
国技館で相撲を観戦する様子が動画を見て居るようによみがえる構成員。手に汗にぎる取り組みや、「ししむら」の肉感までリアルに浮かぶ描写力。ともに素晴らしい。題名は「増嶋」とした方がインパクトがある。

伊藤 敦子

「二〇一八年十二月十二日」

・一尺に満たぬ苗木に実を結ぶクリスマスホーリー四百円也
・硝子にも心ありしや冬ざれば結露の玉をすうつと流しぬ
「クリスマスホーリーの四百円」に、時世があり、個性がある。硝子にも心を感じる感覚の鋭さともをを見るまなざしの確かさが光る。始まりの一首は再考の余地がある。例えば病の予感のような情景描写など。

藤本 太子

映像と心を読者に手渡す

桂 保子

石原 智秋

・蠟石の欠片に見ゆる喉ぼとけ三日前まで元気なりし子
・感情の揺るがぬ日々となりました今日は命日コカ・コーラ供ふ

「夢か現か」の一連は十八歳で事故死なされたご子息への挽歌一連である。一首目から二首目までに流れた悲しみの長い時間に瞑目する。リアリズムの手法が効いて事故当時の生々しい感情が重く読者に届く。きつと長く詠えずに來られたテーマであったのだろう。二首目は柔らかな口語表現が鎮静化した現在の作者の心を上手く掬いとった。映像が見え、心が見える。「脳死とぞ宣告受けてまだ温き手足をさする揺する大きく」は絶唱。

・水張りの終はりたる田のひろびろと風爽やかにさぎ波つくる
・頭数足らぬと目で追ふ幼子の声のみ届くコスモスの中

眞住 彰

「心動けば歌が湧く」が一連のタイトル。題が少し残念。「心が動いて歌が生まれる」のは或る意味、当然。一首目、サ行音が効いて韻律も良く美しいがやや平板な印象は否めない。二首目、幼児を隠したコスモス畑と作者の心のあたたかさ
が快く読者に伝わる。

宮崎 浩

・就活・婚活・終活の活動が現代人は必修となる
タイトルは「迷走」。歌の素材のやや迷走気味が気になる。〈介護殺人〉の話題から二首目の、いま巷でよく耳にする〈終活〉等の話題、ハムラビ法典やレンブラントの自画像なる語も登場する。一首目の独特の感性には惹かれるものがあるので、どうぞ其処を掘り下げて心の綾を次回に読ませていただきたい。

人生の日々を詠む

小谷 博泰

矢野 義信

「S字カーブ」

・セブ島に二年たたかひて玉碎を許されざりし兵なり父は
・ぬばたまの黒船来たる浦賀港引揚港と知る遺品整理に
父の人生のあれこれが、具体的に淡々と描かれていて深い感銘を呼ぶ。作品によつては、事実の報告に終わらぬよう表現や全体の構成などに工夫をすれば、さらによくなるであろう。

「ボケットにしまつ」

朝倉 恵子

・マッチ擦るときの集中なつかしき消えて久しいマッチ工場
・八幡宮の正面広場眠ることこより始まる灘の祭り
幼年期に経験した生活のなかの風景が生き生きと描かれている。思いを主観的に言うときには、なるべく理にながれぬように。

郡 英子

「十五夜の月」

・「花の寺」訪ねて来ればテンポよき木魚の音す花の中より
・会釈してもう会ふことも無き人か四国遍路の道ゆづり合ふ
調べよく、生き生きと日々の思いが描かれている。ただ、主観的にまとめて言うような表現は、減らした方がよい場合がある。

西村 徹

「雪もまた良し」

・読み合わせ、浄書という語が死語化せり平成の世の役場事務室
・ストレスをひととき忘れる六日間 御用納めは雪もまた良し
過ぎてきた職場のありさまをなつかしみながら読むことができ、共感を覚え
た。作品によつては、説明を感じさせない工夫がさらに望まれるであろう。

短歌ひとすじの人生

石橋妙子さん

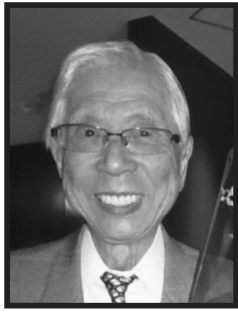


平成九年より歌人クラブの代表を二年間務められ現在顧問の石橋妙子先生が九月十二日逝去。享年九十歳。

庄迫骨折手術後車椅子生活でこの春より背に激痛が続き六月に入院。病床にて五月吟

いつでも夢をく死を悼む

土居 正さん



・いつでも太陽であれと娘へ来たるわが誕生日祝いの葉書こそ太陽

・観音がアンドロイドに変身する世の中にして病に臥しをり

晩生で無精者の筆者が臆歌

行の動物園の歌一連二十首を詠まれ八月末迄その作歌力は衰えなかった。秋に花鏡創立三十五周年祝賀会を企画、準備も整いご本人はもとより会員一同で退院を信じ待っていた矢先の急逝で残念。病院に薬剤師として勤務の傍ら潮音の倉知与年子氏に師事。定年を機に花鏡短歌会を立ち上げ季刊誌を発行。花鏡主宰、潮音選者、現代歌人協会会員。

歌集は『花鏡』を始め十冊歌論集三冊を刊行。福崎町應聖寺と徳島市宅宮神社に歌碑を建立。輝かしい足跡を遺された。

追悼

人クラブの代表在任中サポートして下さった先輩方が今年は相次いで鬼籍に入られた。

土居さんもその一人。八月二十三日逝去。享年九十三歳。

創立五〇周年のときは記念祝賀会の実行委員長を引き受けて下さり、会員から寄付を千円募っただけで費用を捻出し剰余金を経常費に寄付して下さいました。楠田智佐美と二人で同会をつとめ、ファイナルに「いつでも夢を」を斉唱するというカラオケ名人らしい提案で、止めるように説得する拙生のいうことを聞かず決

先生はカリスマ性に富みて『事実と真実の違いを把握して象徴に繋げよ』と、厳しくご指導下さり人を惹き付けて止まなかった。もう叱って頂けない、お逢い出来ないと思ふと胸が潰れそうである。先生の歌に真向かわれる精神とご功績は吾々一同の中に消えることなく生きており哀惜の情は深まるばかりである。終

の歌

・乳母車本読む男犬僧侶容れて緑陰なほゆとりあり

三津野幸代

行。参加者全員起立して歌い好評であった。

冒頭掲出の一首目は「青天」

十月号の遺作「太陽」の導入歌。二首目は小誌「象」秋号で紹介した同じ連作中の歌。寂しい秋が来ることを暗示するような歌だ。

いつでも夢を持って「施されて忘れず、施して語らぬ」の箴言を行動を通して教えてくださった。

土居さん！ありがとう。紙幅の都合でほんの一例を挙げて大人を偲ぶこととします。

楠田立身

受贈歌誌・歌書・会報

平成三十年十一月

令和元年十月

「白珠」月刊

編集発行 安田純生

「白圭」隔月刊

編集発行 内海永子

「とべら」月刊

代表 尼子勝義

「山の辺」月刊

代表 高 蘭子

「花鏡」季刊

代表 石橋妙子

「コスモス姫路」

発行 増井定子

「茅花」季刊

編集発行 前田昭子

「象」季刊

編集発行 楠田立身

「海市」季刊

編集発行 中川 昭

「夢」月刊

編集代表 山根晴正

「波濤神戸」

編集 保田ひで

「文学圏」月刊

編集 青田綾子

「六甲」月刊

発行 浮田伸子

「幻桃」隔月刊

代表 田岡弘子

「薫風」月刊

発行 幻桃短歌会

「津布良」季刊

編集 棚橋好江

「旅笛」季刊

編集 平井恭治

「但丹歌人」隔月刊

代表 長谷川正

「ひめぢ水蓼」隔月刊

編集 尾形 貢

「磔」隔月刊

編集 中島眞喜子

「丹生」隔月刊

代表 小畑庸子

「丹生」隔月刊

代表 生田よしえ

「丹生」隔月刊

代表 竹村公作

「丹生」隔月刊

代表 兼貞靖行

「五月風」

事務 山中洋子

「鶯が城便り」月刊

発行 芦屋水鏡短歌会

「心の花」

発行 藤井幸子

「美加志保」

発行 足立勝蔵

「ひるふいん」

発行 但馬歌会

2018下 合同歌集

発行 美加志保短歌会

「詩と連句 おたたくさ」

発行 小松美枝

「おたたくさの会 鈴木 漢

発行 小松美枝

「ひようご現代詩集」通巻十四集

兵庫県現代詩協会

「秋草」第九巻第十二号

山口昭男

「時の川柳」月刊

時之川柳社 平山繁夫

「印南野文華」

印南野半どんの会 坂井永利

「長野県歌人連盟会報」

長野県歌人連盟

「石川県歌人」40号

発行 陶山弘一

「ふあうすと川柳社

発行 赤井二郎

「詩誌「鳥」75号

発行 なすこういち

「埼玉歌人」

編集発行 御供平佑

「大阪歌人クラブ」

発行 上田 明

「短歌 堺」堺歌人クラブ

発行 小西美根子

「和歌山県歌人クラブ会報」

発行 水木 光

「大分県歌人クラブ」

発行 伊勢方信

「会報」姫路歌人クラブ

発行 濱 守

「風」日本歌人クラブ

発行 三枝昂之

「兵庫県現代詩協会 会報」

発行 たかとう匡子

情熱のひと

伊藤佐重子さん



九月二十六日早朝、林間短歌会の発行人よりの電話で伊藤佐重子氏の訃を受け驚愕した。享年八十五歳。かねてより病を持っていらつしやつたが死につながる程とは思ひもしなかつた。

弘子という縁

志方弘子さん



作品の出詠が滞りがちになり、体調をくずしているとき案じていた志方弘子さんが九月二十七日にお亡くなりになりました。享年八十七歳。咲けば散る花、生あれば誰にも訪れる死—この世の必定

追悼

若い頃から林間阪神支社の中心として故藤田恒男先生を陰に陽に支え、先生亡き後は中心的な存在として、年長者も多い会員を統率する手腕は一同の認めるところであった。尚、伊藤さんは林間短歌会の運営委員としても活躍していた。幾度か入退院を繰り返していたらしいが、愚痴や泣きごとは少しも言わず絶えず前向きに歌も詠んでいた。十月号は珍しく欠詠で、気になり便りをしようとしていた矢先のことであった。林間短歌会の阪神支社の会は尼崎で持た

れていたので三木市在住の伊藤さんには、ずいぶん遠距離なので最近では殆ど出席をさしなかつた。歌誌『ちぬの海』も伊藤さんの病気から廃刊になり、表紙を見て昔を偲んでいる。林間短歌会に対する貢献の大きさ、歌に向き合う情熱には深く感謝すると共に尊敬は限らない。毎月目にしていた林間誌の歌も、もう見られなくなってしまうと思うと残念で淋しい。安らかに眠り下さい。 芝淵田鶴子

は充分解っているのですが、受け入れる覚悟がまだ出来ていなかったのか、時が経つ程に痛切の思いが溢れます。選者として、また毎月の出詠作品送り先となり、これまで「六甲」編集・運営を支える柱となつて下さいました。私は志方さんの個人的な経歴の詳しいことは何も知らな

いままだつた、気付きました。改めて六甲七十巻記念号の年表を繰りますと、六甲入会は昭和五十一年、五十八年に加西市に支部(かしの木短歌会)を発足させ、平成三年には歌集『きんみずひき』を上梓等々あり、やはり積極的な行動力と指導力をお持ちだった証だと感じます。葬儀に列席させて頂き読経の間、祭壇の遺影を仰いでおりました。十年余のお付き合いでしたのに、直接お会いする機会は少なく、こんなに見つめ合うのは初めてでした。「いろいろお世話になりました、本当に有り難う！弘子さん！声には出さぬ心が通じたような穏やかな笑顔を、私の胸に収めました。時ときお話ししましょうね。 岡田弘子

2019年度第2回幹事会報告

- 10月17日13時から 神戸市勤労会館
- ◆ふれあいの祭典兵庫短歌祭実行委員会 (司会) 芝本政宣
- 選考委員会出席者 豊田 幸雄 兵庫県芸術文化協会業務執行理事 兵庫県歌人クラブ幹事30名
- 兵庫短歌祭応募作品審査会
 - 応募総数 一般の部 350首 審査進行・新屋修一
 - ジュニアの部 469首(29校) 審査進行・安藤直彦
- ※予め用意された選者の選考結果に基づき、それぞれの賞にふさわしいかどうかを一首ずつ検討、決定。受賞作品の詳細は本紙参照。
- 兵庫短歌祭実施要領の検討・確認
 - 〈日 時〉 令和元年11月17日(日) 13:00~16:30
 - 〈場 所〉 神戸市勤労会館大ホール
 - 〈進行次第〉 主催者挨拶・表彰式・作品講評・催し(講演 阿木津 英氏)
 - 〈準備・役割〉 会場設営・受付・渉外・講評・講演記録・懇親会他

地区通信

【阪神】5月17日朝日新聞「天声人語」に森垣岳氏(ヤママユ)の短歌6首と兵庫県立農業高校(加古川市)教諭として生きる日々が紹介された。「男らがビニールハウスに集まりてファレノプシスの花と受精す」「モルの酸素を吸えば満たされて我も大気の一部と思う」▼6月1日、芦屋市民センターにて芦屋水獺短歌会主催「加藤直美歌集『金の環』を読む会」を開催。パネ

ラーは林和清氏(玲瓏)、真中朋久氏(塔)、春日いづみ氏(水蓮)。参加者は尾崎まゆみ・安藤直彦・黒崎由起子・岩尾淳子・浮田伸子各氏他六十余名。▼10月30日、吉岡生夫歌書『まじない歌の世界』もしくは幸福論』発行。(吉野節子・加藤直美) 【神戸】5月19日関西雑誌連盟にて浮田伸子氏作品講評を担当。▼5月26日、海市短歌会は明石城へ吟行。参加者中川昭氏他12名。▼6月20日、サンブラザ西館にてこうべ芸術文化

会議文芸部会開催、黒崎由起子氏出席。▼6月23日海市短歌会は神戸婦人会館にて高橋亭留子歌集『聖餐』批評会開催、中川昭氏他12名参加。▼6月26日こうべ芸術文化会議運営委員会開催、黒崎由起子氏出席。▼7月5日いなみの学園創立50周年記念式典において文学園・塩見俊郎氏が功労者として表彰される。浮田伸子氏他5名参加。▼10月30、31日、文学園は室津賀茂神社へ吟行、習日歌会。参加者15名。(黒崎由起子)

【明石】5月29日、明石市柿本神社にて「第162回柿本神社春季献詠祭」を開催。選者楠田立身氏。兼題「川」、競点題「初・始」。出詠・祭典参列者、石飛俊郎・伊藤敦子両氏他55名。▼6月22日、明石ペンクラブ令和元年度総会実施作品発表誌「新明石大門」第3号発行。「明石ペンクラブ通信」第18号発行。▼6月25日、明石城築城400周年記念事業「明石城なんでもコンテスト(短歌部門)」第一期(春)審査会に田岡弘子・伊藤敦子両氏が参加。▼7月、明石短歌会は作品集「ともしび」第35号発行。▼9月24日、「明石城なんでもコンテスト(短歌部門)」第二期(夏)審査会に田岡弘子・伊藤敦子両氏が

参加。▼9月28日、明石ペンクラブ例会にて池本俊六・伊藤敦子両氏が「新明石大門」第3号掲載の短歌合評を担当。「明石ペンクラブ通信」第19号を発行。(伊藤敦子)

【姫路】6月30日、姫路市民会館にて姫路歌人クラブ短歌大会開催。講演、楠田立身氏。演題「へものがたり」斎藤史。司会、生田よしえ。応募241首。姫路市長賞西村徹氏。作品評、濱守・神保原廣己・内海永子、浮田伸子・新屋修一各氏。参加者は青田綾子・小松カヅ子・西村久代他90余名。大会終了後、講師楠田立身氏を囲み懇親会。(飯田進)

【東播】7月10日、31日、稲美町ふれあい交流館のサークル展に茅花短歌会は会員全員の短冊を展示。▼7月21日、茅花短歌会は平成30年度芸術文化団体「半どんの会」文化賞を受賞。表彰式に代表前田昭子他会員及び「半どんの会」役員が出席。▼10月9日、文化賞受賞記念「茅花誌」第193号を発行。▼10月24日、恒例の天満小学校六年生対象の短歌指導に、茅花短歌会より前田昭子・高田道夫・沼田俊郎各氏が参加。▼12月11日、前田昭子は兵庫県立美術館において「ともしび賞」を受賞。(前田昭子)

【中播】5月1日、水襲姫路支社は創刊30周年記念号発行。▼5月10日、水襲姫路支社はキャッスルホテルにて「ひめじ水襲」創刊30周年を祝う会を開催。出席者35名。▼5月21、22日、水襲全全国大会「和歌山(アバローム紀の国)に水襲支社から小畑庸子・小松カヅ子・藤本則子他6名出席。▼8月3日、福崎町文化センターにて山桃忌奉賛第34回短歌祭開催。通泰賞青田綾子氏。桂日呂志・塩澤文子・大西豊子・首藤幸子各氏入賞。出詠数278首。選歌・選評は楠田立身氏。(生田よしえ)

【北播】6月8日、小野市うるおい交流館エクラにて第11回小野市詩歌文学賞・第30回上田三四二記念小野市短歌フォーラム開催。詩歌文学賞受賞栗木京子『ランブの精』(短歌部門)。短歌フォーラム応募数一般の部1,070首。学生部の部7,069首。入選者一般の部最優秀一席遠藤玲奈(東京都文京区)学生部の最優秀大久保恰祐(小野市立下東条小3年)他2名。出席者小野市長蓬萊務他。選者馬場あき子・永田和宏・宇多喜代子各氏。▼9月21日、コミセンおのにて小野市文芸大会(短歌)開催。選者中川昭氏。応募者数165首。市長賞川端

美智子(洲本市)。出席者小野市教育委員会教育管理部長橋本浩明他。▼9月28日、29日アルカディア市ケ谷で「コスモス全国大会」東京開催。大西よしこ・長井淑子・中村京・藤岡成子各氏の4名出席。(芝本政宣)

【西播】9月17日、佐用文化の会(短歌・俳句)は鳥取県米子市の妻木晩田遺跡(最大の弥生の国邑)へ吟行。短歌13名、俳句6名参加。▼9月29日、宍粟市市民短歌会開催。講師尼子勝義。出詠数90首。▼10月2日、西播磨短歌祭選歌会。選者尼子勝義・内海永子・岡本光代・小松カヅ子・七条章子各氏。▼10月5日、赤穂市民文化短歌会開催。講師関西アララギ代表桑岡孝全氏。▼11月1日、佐用町役場会議室にて佐用町主催「さよう文化祭短歌大会」開催。佐用町長賞「秋の風少しばかりを頂きて妻は畠に大根をまく・江見眞智子」。佐用町副町長・町議会議長・教育長・文化協会長・松井起星・安藤直彦各氏ら短歌、俳句関係39名参加。▼11月2日、西播磨短歌祭開催。出詠数、一般167首、学生1,191首。選歌にあたった5名が歌評を行う。

【但馬】7月吉日、藤原町子歌集『蠲の宿』発行。▼11月10日、朝来市大蔵市民会館にて竹柏会「心の花」主催「じろはつたんの里」歌会。講師谷岡亜紀氏。▼11月16日、豊岡市但馬文教府にて「但馬文学のつどい」。▼11月19日、朝来市和田山ホテルにて但馬歌人会主催「秋の大会」。講演尾形貢氏。(足立勝蔵)

【淡路】淡路地区では、約9団体の短歌クラブ(約80名)が短歌祭・新聞等への投稿を通してこの詩形を楽しんでいる。▼7月20日洲本市立図書館にて「第38回全淡路短歌祭」開催。投稿数一般の部105首、ジュニアの部50首。淡路文化協会会長賞、大栗陽子氏。この道は滑走路のように跳べるかも飛んでみようかアクセル踏んで。落合けい子選賞一席、小川節美氏。淡路教育事務所長賞、ジュニアの部一席、山崎姫奈さん。温かな春の日差しを浴びながら日なたぼっこでふ化する私。淡路歌人クラブ賞互選賞、山本弘子氏。他に一般の部8首、ジュニアの部2首を入賞表彰。引き続き、落合けい子氏の講演「推敲の大切さ」と歌評。的確で具体的な氏の一言一句に参加者一同作歌への意欲が掻き立てられ、充実したひと時を過ごすことができた。(島田英樹)

受贈歌集・歌書(兵庫県関係分)

令和元年度 兵庫県歌人クラブ 「兵庫短歌賞・新人賞」作品募集要項

資格 兵庫県歌人クラブ会員及び県下在住・在勤・在学者・他関係者
作品式 未発表短歌20首

1. 作品はA4判400字詰め原稿用紙2枚に浄書、右肩を綴じる
2. 1枚目の欄外に作品表題と新旧仮名遣い別を記入する
3. 作品表題・氏名・生年月日・郵便番号・住所・電話番号・所属結社名を記入した表紙をつける
4. 封筒の表に「兵庫短歌賞応募作品」と朱書きする

応募料 2,000円(作品に同封、切手不可)
締切宛先 令和2年2月15日(消印有効)
〒676-0824 高砂市阿弥陀町南池526-22
鈴木裕子方

兵庫県歌人クラブ「兵庫短歌賞」係
選考 兵庫県歌人クラブ兵庫短歌賞選考委員会(選考委員)8名 未定

発表表 令和2年神戸短歌祭において・会報第203号紙上
令和2年4月29日 兵庫県歌人クラブ総会・神戸短歌祭会場
於県民会館11Fパルテホール

※「兵庫短歌賞」は、その中に「兵庫短歌賞・新人賞・奨励賞」を設け、年度応募作品を選考委員会にて公正、慎重に審査、決定(「該当無し」の場合もある)しております。「兵庫短歌賞」に向け、既に「新人賞・奨励賞」受賞の方も奮ってのご応募をお待ちしています。
(問合せ先) 〒679-5322 佐用郡佐用町上石井685 安藤直彦
TEL0790(85)0021 090-3650-2998

☆「檀」 檀の会作品集第3号
2018年12月 福島妙子
銀ひとつキークースより取りはなつ
もう帰らないふるさとの鍵を

☆「聖餐」 高橋亭留子
北羊館 5月30日
プランターの夫のだいご輪切りにて
平和に浮けり今朝の味噌汁

☆「ともしび」 白石短歌会作品集35
7月 湯原蓉子
この家族六人なれば大賑わいあエ
ンゲル係数エンゼル係数

☆「レダの靴を履いて」 塚本邦雄の歌と歩く
歌と評 尾崎まゆみ
書肆侃侃房 8月7日

☆「第64回全国川柳作家年鑑」
ふあうすと川柳社 9月臨時増刊号
発行 赤井二郎

☆「母子像」 小松美枝
どるふいん短歌同好会 盛夏
薔薇の葉のひるがえる夕べはろけし
や銀の光に泛ぶ母子像

☆「風の口笛」 岡本光代
波濤双書 10月22日
話し相手のをらぬ冬の夜おもてより
裏より聞こゆ風の口笛

神戸生活創造センターについて

「広く社会に開かれた会をめざしたい」と、兵庫県歌人クラブは「生活創造グループ」に登録しています。現在会報の校正や勉強会に利用しています。9月より新長田合同庁舎に移転しました。新しい建物でとても気持ちの良いところです。どうぞ積極的に使用していただきますように。

新長田合同庁舎 TEL078-360-8530
最寄駅 市営地下鉄海岸線駒ヶ林駅下車すぐ
又は JR新長田駅徒歩10分
お問合せ 会報担当 森嶋郁子 TEL078-781-0846

新入会員の紹介

平成30年	令和元年
1月 板倉千鶴子(多可郡)	5月 牧野 真弓(加古川)
2月 山縣 英祐(神戸市)	6月 (再入会)
秋田由貴子(多可郡)	永瀬たづ子(姫路市)
藤原 暁美(加古川市)	8月 高橋亭留子(神戸市)
前田 美樹(加古川市)	中山みよ子(たつの市)
4月 多田まどか(加古川市)	9月 大西 迪子(姫路市)
森永 理恵(明石市)	
恵木 照子(神戸市)	
金井 伸夫(神戸市)	

神戸短歌祭のご案内

◇入場無料◇

日時 令和2年4月29日(祝)
午後1時～

場所 兵庫県民会館11F
パルテホール

- 兵庫短歌賞表彰式・総会
- 講演 島内 景二氏
電気通信大学教授

「和歌と異文化統合について」

兵庫県歌人クラブのホームページを活用してください

兵庫県歌人クラブでは、「会報」と併せてホームページを開設しています。皆様との情報交換の場としてご活用ください。

URL: <https://hyougokenkazin.jimdo.com/>
※「兵庫県歌人クラブ」でも検索できます。

【提案1】 地域の短歌に関する行事をPRしてください
→「催しナビ」というコンテンツにて紹介します。

【提案2】 結社・短歌教室・個人ブログをリンクしましょう
→「リンクファイル」を設け、情報網を広げます。

※エッセー・歌集紹介・作品鑑賞などの原稿もお寄せください。

◇余滴◇
8、9月にご逝去の先輩方の笑顔に、気持ちを引き締めて歩んでいかねばと励まされます。多くの支えにより今号も形を成しました。感謝しています。
藤本朋世・山田文・森嶋郁子